編集後記
Editor's Postscript

鈴 木 晃志郎（地域生活学研究会）
SUZUKI Koshiro, Ph.D. *JIRCL, Vol. 8 Chief Editor*

地域生活学研究会は『地域生活学研究』第 8 号をここに刊行した。投稿論文としては岐阜県中心部で開催されている「パルコ de 朝市」を事例に、農産物販売の場であるファーマーズマーケットが市街地に居住する高齢者や生産者同士の交流拠点としても副次的機能を果たしていることを明らかにした林 琢也ほかの論文、自殺対策基本法の改正が自殺対策窓口担当者にもたらした影響について、富山県内の自治体関係者へのヒアリングをもとに検討した立瀬剛志・須永恭子による報告の 2 報を掲載した。

今年特筆されるべき事態は大きく分けて 2 つある。1 つめの事態は、投稿論文の傾向に悪い意味での変化がみられたことであった。6 編の投稿があったものの査読の結果 4 編が掲載不可となり、僅か 2 編の掲載数でありながら数字の上では 3 割強の採択率となった。ちなみに 6 編のうち 3 編は留学生からの寄稿であった。その多くは論文の体をなしておらず、大学院生の寄稿でありながら恐らくは指導教官の事前指導も受けずに寄稿されていると思われる。敢えて苦言を呈するならば、「軽量」査読誌の言葉のもつ意味を誤解した内容の原稿が投稿されてきたことを記しておかなければならない。

弊誌は、投稿者の投稿機会を最大限確保しつつも軽量査読付き学術誌として一定の水準は確保することを編集方針に掲げてきた。軽量とはいえ査読付きであり、寄稿論文のほとんどは外部査読者に依頼して厳正に審査いただいている。査読者および編集の一切はボランティアであり、協力したからといって特段のメリットのない労働を、閲読者の善意で提供していただいている。その営為は誌面の裏側に隠れて見えることはないが、雑誌の運営には関係者によるそれ相応の時間的、精神的コストが注がれていることに留意していただきたい。推敲がなされていない原稿を投稿することは、それら関係者へのこの上ない侮辱となりうることをご理解いただいた上で、節度あるご寄稿をいただければ幸いである。

本号におけるもう一つの特筆すべき事態は、弊誌が J-Stage 掲載誌に認定されたことであろう。同様のデータベースである CiNii が機関リポジトリ上に掲載された学術情報リンクをデータベース化しているのに対し、J-Stage は国立情報学研究所の審査を経て選ばれた学術雑誌のみが原稿の登載を許されるアップロード型のデータベースであり、基本的には国内学会誌を掲載対象としている。2013 年に産声を上げてから足かけ 5 年、これで弊誌もサーキュレーションの面では国内の一流学会誌と遜色ない扱いになったといえる。J-Stage 掲載誌となったことで弊誌の掲載論文には固有の doi が付与されることになった。また、査読付き学術誌である旨の認証も J-Stage 上に明示され、第三者からも視認できる格好となっている。ゆえに今後は、例えば業績審査などの際に混乱を招くこともなくなるものと考えられる。

公的資金の裏づけのない弊誌は、アップロードされる論文と若干部製本される雑誌本体以外には

何ら宣伝媒体をもたない。そもそも認知度が高くないために寄稿数も低調な状態が続いているのが現状である。その分、既成の学問領域にしばられない自由な発想で意欲的に時事問題へも取り組み、微力ながら学問のレゾンデートルを多方面から問い直す雑誌としての社会的使命を果たしていきたいと考える。

（2018. 03. 31）